

宮古長浜方言の動詞の活用

名嘉真, 三成

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

1985-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012721>

宮古長浜方言の動詞の活用

名 嘉 真 三 成

1. はじめに

伊良部島は、宮古本島から西方へ約8キロメートル行った所に位置する。面積28.3平方キロメートルの島には七つの集落があり、全体の戸数は約2000戸、人口はおよそ10000人である。

言語的には、伊良部方言は佐良浜方言、伊良部・仲地方言、国仲方言、長浜・佐和田方言の四つに区画される。この四方言は互いに方言差が著しく、またいずれも宮古本島方言と意味が通じないほど異なる。

本稿で扱う長浜方言は、音声の面でそり舌音 [ɺ], 無気音 [kʰ・tsʰ], 半狭母音 [U], 文法の面で終止形に /kaci/, /kafu/ (いずれも《書く》) の二形を有するなど、特色のある方言である。/kaci/と/kafu/の用法はどう違うのかという興味もさることながら、はたして/kafu/は日本祖語の*kaku (書く) に遡るか否か重要な問題である。

ここでは、長浜方言の「動詞の活用」について記述する。日本祖語の活用体系を再構するには、まず諸方言の活用体系の実態を把握する必要がある。

なお、インフォーマントは、

名嘉真トミ (大正14年生 元長浜230)
調査は、1976年8月と翌年の8月の二回にわたって行った。

2. 動詞の活用

長浜方言の動詞の活用を記述する前に、まず音韻について略述する。

2.1 音韻

2.1.1 音韻体系

2.1.1.1 音素

長浜方言には28個の音素が認められ、それぞれ次のように分類される (/ / は音素記号を、[] は音声記号を示す)。

子音音素 /p, k, g, t, d, c, s,
z, r, n, f, v, p, b,
m/ (15個)

半母音音素 /j, w/ (2個)

母音音素 /i, e, i, a, u, o/ (6個)

拍音素 /Q, L, N, V, M, / (5個)

2.1.1.2 拍構造

上の音素が形成する拍構造は、次の通りである。

(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)
/CV/ /CSV/ /Q/ /L/ /N/ /V/ /M/

このうち、/CV/のCおよびVの位置には原則としてすべての子音と母音が立つが、ti, di, niなどのように欠ける拍もある。(3)~(7)の拍は、いずれも成節的である。

2.2 音韻対応

ここでは、母音対応のみを示すにとどめる。

長浜方言の短母音と奈良朝中央語の短母音とは、次のような対応関係にある。

奈良朝中央語 a, i甲, i乙, u, e甲, e乙, o甲, o乙

長浜方言 a, i, i̇, i, u, i, i, u, u

ただし, c.s.z の直後のuは, 長浜方言ではiである。

上記の母音対応語例を示すと, 次の通りである。

/a/と/a/の対応

/ʼaka/《赤》, /taʼa/《田》 /naM/《波》
/pana/《花》 /ʼjama/《山》 /bakamunu/《若者》

/i_甲/と/i/の対応

/ʼicī/《息》 /cīmu/《肝》 /muzī/《麦》
/pītu/《人》 /tubī/《飛び》(連用形)

/i_乙/と/i̇/, /i/の対応

/cīcī/《月》 /cīʼi/《霧》 /pīʼi/《干・噓》
(連用形) /kiʼi/《木》 /ʼukiL/《起きる》 /MbiL/《伸びる》

/u/と/u/の対応

/ʼusī/《臼》 /fusa/《草》 /musī/《虫》
/ʼjukani/《床》 /nusī/《主》

ただし, c.s.z の直後の/u/には/i̇/が対応する。

/cīmi/《爪》 /cīnu/《角》 /sīʼi/《巢》
/mizī/《水》 /kizī/《傷》

/e_甲/と/i/の対応

/kaki/《書け》(命令形) /kugi/《漕げ》
(命令形) /pira/《辮》 /miduM/《女》
(←*medəmə)

/e_乙/と/i/の対応

/kiʼi/《毛》 /saki/《酒》 /pīgi/《髭》
/kugiba/《漕げば》(条件形)
/miʼi/《目》 /ʼami/《雨》

/o_甲/とu/の対応

/ʼufuʼu/《送くる》(←*ʼoku-) /tuzī/《妻》
/nuʼu/《野》 /muku/《婿》

/ʼjuL/《夜》

/ō_乙/と/u/の対応

/ʼukusī/《起こす》(←*əka-) /ʼutu/《音》
/nuʼusī/《乗せる》 /mucī/《持つ》 /ʼjuʼucī/《四つ》

3. 動詞の活用

3.1 語形替変と活用形

さて, 長浜方言の動詞の語形替変の諸形式を/kafu/《書く》を例にとって示すと, 次の通りである(例は必要最小限に示すにとどめる)。

/baʼa kakaN/《ぼくは書かない》 /kicīgiN kacī/ (kafu) busīmunu/《きれいに書きたい》
/Nnama du kakiʼi ʼuL/《今, 書いている》
/cīnu du kacī (kafu) taL/《昨日書いた》 /zī ʼʼju kacī (kafu) /《字を書く》 /baga kacī (kafu) M/《ぼくが書く!》 /naʼaʼju kacī (kafu) pītu/《名前を書く人》 /kakiba du kakaʼiL/《書けば書ける》 /puQci kaki/《早く書け》

以上が長浜方言の/kafu/《書く》に見られる語形替変のすべての形式である。これらの諸形式とこれまでに調査した約50語の動詞の語形替変の形式とを比較検討すると, 前掲の諸形式では次のものを活用形として認めることができる(ただし, () は後接する形式を, < > は free variation の関係ではないがそのようにも言うとのことを表す)。

- (1) kaka (N) 未然形
- (2) kacī <kafu> (busīmunu) 連用形
- (3) kakiʼi 接続形
- (4) kacī <kafu> (taL) 過去形
- (5) kacī <kafu> 終止形₁
- (6) kacīM <kafuM> 終止形₂
- (7) kacī <kafu> 連体形

(8) kaki (ba) 条件形

(9) kaki 命令形

上の活用形には、同一の形式が二つまたは四つ挙げられている場合がある。たとえば、

(2), (4), (5), (7) は同形であり、また (8), (9) も同形である。しかし、これらの活用形は、他の種類の動詞では異なる形として現れることと、互いに文法的機能が違うことによって区別されるものである。

3.2 活用体系

次に、3.1で活用形と認定された形式を語幹と語尾に分析し、さらに体系化して示すと別表のようになる。

3.3 活用形

続いて、各活用形の意義・職能および接辞などについて、用例を示しながら述べる（用例は「書く」を中心に示す）。

3.3.1 未然形

1) 単独で意志や勧誘の意味を表す。

Nzi ra'a бага kaka 《どれ、ぼくが書こう》
zu'u ra'a MMnasi'i kaka 《さあ、みんな
で書こう》

2) 反復の形で、さらに意味を強調する。

narasi'i kaka kakati'i 'asi 《自分で書
こう書こうとする》

3) 接続助詞/ba/《ば》がついて、仮定条件を表す。

kakaba du 'juM ma'i 'asira'iL 《書けば読
みもできる》

4) 助詞/di/《う》がつき、意志・勧誘の
意味を示す。前掲 1) より強調の意味が
ある。

Qvaga kakada ka'a бага kakadi 《君が書
かないなら、ぼくが書こう》
zu'u mata kakadi 《さあ、また書こう》

5) 終助詞/ba'a'i/《たらなあ》(cf. ba'ja)
がついて、願望の意味となる。

zi'inu kagikaL pītunu kakaba'a'i 《字のき
れいな人が書いたらなあ》

6) 助動詞/N/《ない》や/dja'aN/《ない》
がつき、否定の意味を表す。前者は状態
の打ち消しを、後者は意志の打ち消しを
示す。

karja'a Mmjada kakaN 《彼はまだ書かな
い》

ba'a zeQta'i kakadja'aN do'o 《ぼくは絶
対に書かないぞ》

7) 助動詞/si/《す》、/simiL/《させる》
がついて、使役の意味となる。ただし、
/si/《す》は、四段・ラ変動詞以外の動
詞には接続しない。

paNtaka'iba 'uQtuN kakasi 《忙しいので
弟に書かす》

madunu 'aL pītun kakasimiL 《暇のある
人に書かせる》

8) 助動詞/iL/《れる》、/ra'iL/《られる》
が後接し、受身・可能の意味を表す。前
者は四段動詞に接続し、後者はそれ以外
の動詞に接続する。

siNsi'iN na'a'ju kaka'iL 《先生に名前を
書かれる》

kagi'ca kaka'iL pītun kakasi 《きれいに
書ける人に書かせ》

'aca'a pja'asi'i'ja 'ukira'iN 《明日は、早
くは起きられない》

なお、/iL/《れる》、/ra'iL/《られる》
は、東京方言などのように尊敬の意味を
表すことはない。

9) 尊敬の助動詞/maL/《れる》や/sa-
maL/《られる》がつく。/maL/《れる》

長 浜 方 言 の 動 詞 の 活 用 表

種 類					活 用 形		未然形	連用形	接続形	過去形	終止形 ₁	終止形 ₂	連体形	条件形	命令形
					語 例	語 幹	1	2	3	4	5	6	7	8	9
I	1	1	1 書 く	kak	a		i'i							i	i
				kac		i		i	i	iM	i				
				kaf		u		u	u	uM	u				
			2 漕 ぐ	kug	〃		〃						〃	〃	
				kuz		〃		〃	〃	〃	〃				
				kuV		φ		φ	φ	M	φ				
			3イ 買 う	ka'	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
				3ロ 通 う	ka'ju'	u	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
			4 飛 ぶ	tub	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
				tu'		〃		〃	〃	〃	〃				
		2	5イ 干 す	pus	〃	i	〃	i	i	iM	i	〃	〃		
			5ロ 知 る	Qs	〃		〃								
				si'		i		i	i	iM	i				
			6イ 待 つ	mac	〃	i	〃	i	i	iM	i	〃	〃		
			6ロ 着 る	Qc	〃		〃						〃	〃	
		ci'			i		i	i	iM	i					
		3	7イ 座 る	biz	〃		〃						〃	〃	
				bi'		i		i	i	iM	i				
			7ロ 言 う	'a'iz	〃		〃						〃	〃	
				'a'		i		i	i	iM	i				
			8 読 む	'jum	〃		〃						〃	〃	
				'juM		φ		φ	φ	M	φ				
			9イ 取 る	tur	〃								〃	〃	
				tu'			〃								
				tuL		φ		φ	φ	M	φ				
			9ロ く っ っ く	kuQr	〃		〃						〃	〃	
				kuL		φ		φ	φ	M	φ				

	2	5	10	被る	kaQv	〃		〃					〃	〃
					kaV		φ		φ	φ	M	φ		
			4	11	作る	cuQf	〃		〃				〃	〃
						cufu'		u		u	u	uM	u	
			12	有る	'ar	〃		〃					〃	△
					'aL		φ		φ	φ	M	φ		
			12	居る	'ur	〃		〃					〃	〃
					'uL		φ		φ	φ	M	φ		
			13	死ぬ	sīn	〃		〃					iri	iru
					siN		φ		φ	φ	N	φ		
			14	いらっしゃる	Mmj	〃								
					Mmja'			〃					〃	
					Mmjac									〃
					MmjaL						M			
II		1	15	起きる	'uki	φ	φ	'i	φ	L	LM	L	ri	ru
		2	16	見る	mi'i	φ	φ	φ	φ	L	LM	L	ri	ru
III		1	17	為る	'asu	φ								
					'asi			'i						
					'aQ								si	su
					'as		ī		ī	ī	īM	ī		
		2	18	来る	ku	'u								'u
					Q			ci'i	φ				fi	
					cī		'ī			'ī	'īM	'ī		
					fu		'u			'u	'uM	'u		

※ 上の表でφ印は活用語尾がないことを，△印は活用形がないことを示す。また，〃印は最上段の語尾と同じであることを表す。

は四段動詞につき、/samaL/《られる》
はそれ以外の動詞につく。ただし、カ変
動詞/fu'u/《来る》には尊敬の助動詞は
後接せず、「来られる」の意味では本動
詞/MmjaL/《いらっしゃる》を用いる。
siNsi'iga kakamaL《先生が書かれる》
sju'uga du ki'i'ju 'ibisamaL《おじいさん
が木を植えられる》
siNsi'iga MmjaL《先生がいらっしゃる》

3.3.2 連用形

1) 単独で中止の形となる。

'uQtu'u zi'i'ju kaci suza'a 'i'iju kafu《弟
に字を書き、兄は絵を描く》

2) 反復の形で、動作の進行状態を表す。

Nnama du kaci kaciti'i 'uL《今、書きつつ
ある》

3) 助動詞がついて、状態や様態などを示す。

① /busikaM/《たい》の後接で、願望
の意味となる。

kagi zi'isi'i kacibusimunu《きれいな字
で書きたい》

② /gikaM/《そうだ》がつき、動作が
行われそうな様態の意味を表す。ただ
し、伝聞の意味は表さない。

taru ma'i kakaNsuga kanu pitu'u kaci
gimunu《誰も書かないが、あの人は書
きそうだ》

du'usi'i du kafugikaL《自分で書きそう
だ》

③ /NfukaM/《にくい》で、動作が行
われにくい状態を表す。

kunu zi'ija kaciNfumunu《この字は書き
にくい》

kafuNfumunu《書きにくい》と言える

かどうかは未詳。

④ /gu'ukaM/《にくい》がついて、③
とほとんど同じ意味を示す。

kunu zi'i ma'i kacigu'umunu《この字も
書きにくい》

この場合、kafugu'umunu《書きにくい》
と言えるか否かも未詳。

⑤ /ju'usi/《できる》の接続で、可能
の意味となる。

baga du kaci'ju'usi《ぼくが書くこ
とができる》

kafu'ju'usi《書くことができる》
が表現可能かどうかは不明。

4) 助詞が後に続く形。

① 係助詞の/ma'i/《も》、/du/《ぞ》、
/ja/《は》などが続く。

kaci ma'i 'juM ma'i 'asuN《書きも読みも
しない》

ba'a kaci du si《ぼくは書く》

zi'i kaQca mucikasimunu《字を書くのは
難しい》(cf.kaQca←kaci《書き》+'ja《は》)

② 接続助詞の/gacina/《ながら》、
/Qcja'aN/《ながら》がつく。意味は
両形ともほとんど同じである。

kacigacina 'juM《書きながら読む》

kaciQcja'aN panaQsu 'asina《書きながら
話をするな》

③ 格助詞/ga/《が》がついて、動作の
目的を表す。

zi'i kaciga ma'iNka'i 'idiL《字を書きに
前へ出る》

5) 補助動詞が続く形、この場合、kafuの 形は用いられない。

① /kaniL/《かねる》がつく。

na'a'ju kaci kaniL《名前を書きかねる》

- ② /na'usi/ 《直す》がつく。

'jana zi't'ju kaci na'usi 《きたない字を書き直す》

- ③ /pazimiL/ 《始める》がついて、動作の始動の意味となる。

Nnama du kaci pazimiL 《今、書き始める》

- ④ /patiL/ 《果てる》がつき、動作の終了を示す。

Mmja kaci pati'i nja'aN 《もう書いてしまった》

- ⑤ /cizikiL/ 《続ける》がつく形。

'juLgami kaci cizikiL 《夜まで書き続ける》

- ⑥ /nukusi/ 《残す》がつく。

kaci nukusiTaL 《書き残した》

- ⑦ /maciga'iL/ 《間違える》が続く。

kaci maciga'iL 《書き間違える》

3.3.3 接続形

- 1) 単独で中止の形となる

ba'a zi't'ju kaki'i karja'a 'i'ju kafu 《ぼくは字を書いて、彼は絵を描く》

- 2) それのみで動作が完了する意味を表す。

baga du Nnama kaki'i 《ぼくが、今書いた》

- 3) 係助詞/ma'i/ 《も》, /du/ 《ぞ》, /'ja/ 《は》が続く。

kaki'i ma'i fi'in 《書いてもくれない》

kaki'i du 'utaL 《書いていた》

kaki'i'ja mi'iQtaN 《書いてはみなかった》

- 4) 接続助詞/kara/ 《から》がつく。

masagaN kaki'ikara 'juM 《正しく書いてから、読む》

- 5) 補助動詞などが続く。

- ① /'aL/ 《有る》がつき、結果態を示す。
kumaN du kaki'i 'aL 《ここに書いてある》

- ② /'uL/ 《居る》がついて、進行態を示す。

Nnama du kaki'i 'uL 《今、書いている》

- ③ /fi'iL/ 《くれる》がつく。

'i'ju kaki'i fi'iL 《絵を描いてくれる》

- ④ /nja'aN/ 《ない》の後接で、動作の完了を表す。

Mmja kaki'i nja'aN 《もう、書いてしまった》

3.3.4 過去形

助動詞/taL/ 《た》がついて、過去・完了の意味を表す。ただし、/kaci/に続く時は単純過去を示し、/kafu/に続く場合は状態過去を示すようである。

cinu du kacitaL 《昨日書いた》

Nkja'aNna 'ju'u du kafutaL 《昔は、よく書いていた》

3.3.5 終止形₁

- 1) 単独で言い切りの形になる。

kagi zi't'ju kaci 《きれいな字を書く》

masagaN kafu 《正しく書く》

- 2) 接続助詞/ti'i/ 《と》, /suga/ 《けど》がつく。

du'usi'i kaciti'i 'a'itaM 《自分で「書く」と言った》

kacisuga kaka'in 《書くけど、書けない》

3.3.6 終止形₂

終止形₁より強調の意味がある。

- 1) 単独で文を終止する。

Qvaga kakada ka'a бага kaciM 《君が書かないなら、ぼくが書く！》

pitumi kafuM 《一緒に書く！》

- 2) 終助詞/do'o/ 《ぞ》がつく。

baM ma'i kaciM do'o 《ぼくも書くぞ》

Nnama kafuM do'o 《今書くぞ》

- 3) 接続助詞/ti'i/《と》について、進行態を表す。

kaciMti'i du 'asi'i 'uL 《書いて（いる状態をして）いる》

kafuMti'i du 'uL 《書いて（いる状態で）いる》

3.3.7 連体形

体言を修飾したり、助詞が続いたりする形である。

- 1) 体言を修飾する形。

kaci pītu'u mi'iN ro 《書く人はいないか》

ka'iga du kafu pazi 《彼が書く筈だ》

- 2) 助詞が続く形。

- ① 格助詞/'juL/《より》がつく。

kaci'juL su'u jumiba du masi 《書くより読めばいい》

kafu'juQra 'jumi 《書くよりは読め》

- ② 副助詞/tja'ana/《ばかり》, /kja/《まで》がつき、程度を表す。

kaci'tja'anasi'i 'jumaN 《書くばかりで読まない》

baga kafukja maci'i 'uri 《ぼくが書くまで待っている》

- ③ 終助詞の/na/《な》がつく。禁止の意味を表す。

Qsjana zi'isi'i kacina 《きたない字で書くな》

Qva'a kafuna 《君は書くな》

- ④ 係助詞/du/《ぞ》の結びになる。

この用法には/kafu/を用いるのが普通のようなのである。

zi'i'ju ba'a masagaNti'i du kafu 《字はきれいに（ぞ）書く》

3.3.8 条件形

接続助詞/ba/《ば》がつく形である。確定条件と仮定条件の二つの意味を表す。

situmutikara kakiba du 'jurarabiNna 'u'waLtaL 《朝から書いたので、夕方には終わった》

Qvaga kakiba du ka'i ma'i kafu 《君が書けば、彼も書く》

3.3.9 命令形

- 1) それのみで命令の意味を示す。

puQci kaki 《速く書け》

- 2) 終助詞/'jo'o/《よ》, /ra/《よ》, /ha'i/《ね》がつき、強い命令や柔かい命令を示す。

masagaN kaki 'jo'o 《正しく書きなさいよ》

puQci kaki ra 《速く書けよ！》

kunu kabiN na'a'ju kaki ha'i 《この紙に名前を書けね》

4. おわりに

以上、これまで長浜方言の動詞の活用について記述した。しかし、これですべてが完全に記述された訳ではない。今後とも厳密な記述研究を要することは言うまでもない。特に、終止形の/kaci/《書く》と/kafu/《書く》の用法の違いについては、さらに論究する必要がある。ともあれ、今後は宮古方言の動詞活用の日本祖語に遡る部分とそうでない部分を、明らかにすることが望れる。

主要参考文献

服部四郎

1959『日本語の系統』（岩波書店）

1984『音声学 カセットテープ、同テキスト付』（岩波書店）

仲宗根政善

1961『琉球方言概説』（『方言学講座 第4巻』 東京堂）

外間守善

1971『沖縄の言語史』（法政大学出版局）

中本正智

1983「琉球語のサ変動詞“為る”の活用」（『都立大学人文学報』第160号）

内間直仁

1984『琉球方言文法の研究』（笠間書院）

平山輝男（共著）

1967『琉球先島方言の総合的研究』（明治書院）

1983『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』（桜楓社）

本永守靖

1978「宮古平良方言の形容詞」（『琉球大学教育学部紀要』22集）

名嘉真三成

1982「宮古西原方言の動詞の活用」

（『琉球の言語と文化』—仲宗根政善先生古稀記念—）